住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒　604－8083
京都市中京区三条柳馬場東入中之町１０
代表取締役社長　　川下　晃正
ＴＥＬ　（０７５）２１１－７２７７
ＦＡＸ　（０７５）２１１－７２７０
http://www.kyoto-archi.co.jp/

「わらじ医者の女房」早川ゆきエッセイ

早川一光監修

かんげつ
『寒月』

定価　2,000円＋税

（80ページ　フルカラー　上製本）

エッセイ　早川　ゆき
画　神門やすこ

忘れられないあの頃、どうしても伝えておきたいことがある――「わらじ医者の女房」早川ゆきエッセイに『福祉のひろば』の表紙絵でおなじみの神門やすこが一つひとつのエピソードに込められた思いに共感し、描き下ろしの画を添えて、一冊のすてきな絵本が誕生しました！

新世界や西成で起っている変化に向き合って

新世界。通天閣が向こうにそびえ、大阪名物の“串カツ”屋が軒（のき）を連ねる。今日も多くの外国人観光客がここを訪れています。この地や周辺地もいま再開発や投機の対象にされ、周辺地域のかかわりも問われています。

新今宮駅の南側に「西成労働福祉センター」がありました。2019年３月31日でその役割を終え、これまでの機能は、南海線の高架下の仮設に移転しました。この建物の取り壊しは釜ヶ崎のまちを大きく変えていきます。今号の特集をお読みください。

釜ヶ崎の急激な変化のようすは、建物からもうかがえます。奥の建物が「あいりん総合センター」です。センターの上層部は市営住宅。市営住宅の一部が、写真手前の小学校跡地の真新しい建物に移りました。

釜ヶ崎の東側、今池本通商店会や新開筋中央商店街の内風景をみると、日本ではあまり見かけない漢字を使った名前の店が軒を連ねています。この地域一帯に〈中華街〉をつくる構想が浮上しています。まず、シャッター通りになりかけた商店街にカラオケ、居酒屋が広がり、中華料理店へと変化しています。

（写真　塩見一弥、文　高倉弘士）

福祉のひろば
2019年6月号

【ひろばトーク】
研究所事務局次長に就任しました　塩見　一弥　6

●特集●　サービスハブのまち、釜ヶ崎を
わたしたちは語り、考えた

日雇い労働者は釜ヶ崎からいなくなったのか？　水野阿修羅　12
このまちで生まれ、このまちで育った住民として　西口　宗宏　16
このまちってなんでもできそう！
——子どもたちが見た釜ヶ崎のまち　山田　文乃　20
あらたな課題とサービスハブという取り組み　白波瀬達也　24
地域のなかで子どもたちを守るために　荘保　共子　28
討論　32
まちづくりひろばをふりかえって　ありむら潜　38
参加者の感想　41
変化していくまち釜ヶ崎
～「新今宮サミット」に参加して～　高倉　弘士　42

●トピックス●

連載終了特別企画◆相澤與一先生に聞く　44
福祉人材を確保する確かな方策を
～保育・障害・高齢の分野を超えて～　堤　昭子　56
ＧＷ中の保育園、施設などは？　58
第25回社会福祉研究交流集会のお知らせ　60

●連載●

相談室の窓から
Ｓ男さんの心配ごと（その２）　青木　道忠　64
育つ風景
きょうだいを育てる悩み　清水　玲子　66
ひととしてあたりまえに生きたい
大阪聴力障害者協会の設立　清田　廣　68
映画案内
『マルクス・エンゲルス』　吉村　英夫　70
現代の貧困を訪ねて
「あいりん総合センター」の移設・閉鎖問題　生田　武志　72
似らすとれーしょん道場　似顔絵まんがアート
似顔絵で風刺するのじゃ～！（その２）　ラッキー植松　74
ホームレスから日本をみれば　ありむら潜　76
花咲け！　男やもめ　川口モトコ　77

みんなのポスト　62／福祉の動き　78／今月の本棚　81/
●グラビア●　新世界や西成で起っている変化に向き合って

●表紙の絵●
神門やす子

ひろば トーク

研究所事務局次長に就任しました

総合社会福祉研究所事務局次長　塩見（しおみ）　一弥（かずや）さん

私は一九八三年、日本福祉大学を卒業し、大阪福祉事業財団豊里学園に就職しました。知的障害のある子どもたちと暮らしを共にすることは、大きな新鮮さとともにおどろきの連続でした。私が就職した当時は、八〇人の児童のほとんどが、思斉（しせい）養護学校の小・中・高等部に徒歩で通学していました。そして、何人かは高等部を卒業後も、学園で生活しながら、隣の共同作業所に通っていました。いわゆる「年齢超過児」で、卒業後の行き場がみつからない子どもたちが増えはじめるころだったのです。

下校してきた子どもたちが、すぐにお風呂に入ることにまずおどろきました。職員数が少ないために、男女の入浴介助にそれぞれ三人があたり、残り二人の職員が入浴を終えた子どもたちの見守り（「集中把握」と言っていました）をしていたのです。お風呂に入ったあと、天気の良い日は園庭で、野球やブランコ・砂遊びに汗だらけ・泥まみれになりながら興じた後、五時から夕食という生活。これは一般家庭では考えられないことでした。

入浴を夜にしよう、夕食時間も三〇分遅くしよう、と日課見直しの検討がはじめられていました。そのためには、二〇時三〇分までの遅出勤務者を四人以上増やす必要があり、労働条件の変更を伴うものでした。「少しでも子どもたちの暮らしをゆたかにしよう」と、職員会議でも労働組合の班会議でも議論を重ねて見直しを実現していきました。

子どもたちの生命を守るために、やむを得ないとはいえ、玄関など数か所にカギがかかっていることにもおどろきました。また、はじめの半年間は産休代替の非常勤職員だったので、全体職員会議に出席できず、その時間は掃除や子どもたちの衣類整理などの仕事しかできないこ

しおみ　かずや

日本福祉大学社会福祉学部卒業。
社会福祉法人大阪社会福祉事業財団豊里学園、全国福祉保育労働組合大阪地方本部、社会福祉法人北摂福祉会ともがき、21世紀・老人福祉の向上をめざす施設連絡会事務局、社会福祉法人大阪福祉事業財団城東養護老人ホームなどに勤務。

とにも違和感をもっていました。

それらいろいろと感じることを率直に先輩職員に相談したり、組合や全障研（全国障害者問題研究会）サークルで発言したりしながら、学園の住環境を良くしていこうと一生懸命になりました。思いを一緒にしている先輩職員がたくさんいることが、大きな支えでした。

運よく一〇月から正職員になることができ、次の年から新任職員研修や労働組合分会の会議などを通じて、他業種・他職種の仲間たちと交流ができるようになって、大きな学びや、働き続けるはげみを得ることができました。大阪愛護協会や、大阪市施設連盟などの会議に出席する担当に就いたことも、学びの場になりました。

そして、総合社会福祉研究所が設立され、第一回社会科学・社会福祉基礎講座を受講しました。他法人からの受講者と一緒にゼミなどで学び合う講座は、宿題もあってなかなかたいへんでしたが実に楽しい学びができたことを思い出します。私は、社会福祉の専門職労働者論をテーマに修了論文にとりくみました。

社会保障・社会福祉をめぐる情勢、国民の暮らしや労働の困難の進行を憂い、「何とかしたい」という思いが広がり続けています。そして、粘り強いゆたかな実践が続けられています。これらを紹介し、はげましあって、願いや要求を一つひとつ実現していくための理論的な役割が、研究所に求められていると思います。事務局としての任を担っていけるよう、学んでいきたいと思います。

特集

釜ヶ崎はサービスハブのまち

個（孤）として生きざるを得なかったのか。日本の経済発展といわれるなかで、労働力の都市部への集中が急激に進み、労働力をうばわれた農村や地方は、共同体が弱体化し、多くの人々は、都市部に家族とはなれて、個として生きざるを得なかった。加齢とともに、企業社会は、その労働力を疎外しはじめ、経済構造の変化の影響を人々は直接受ける。

しかし、そうした人々は人としての尊厳を失ったわけではない。社会は、労働力として成立しない人として烙印を押し、社会からの排除も放置しはじめたが、個人の尊厳を守り、取り戻そうとする人々、支えともにする人々も少なからずいた。

夏に開催する社会福祉研究交流集会では、以前、「排除から包摂の社会へ」をテーマにおこなわれたことがあった。釜ヶ崎の個（孤）とならざるを得なかった人々へのまなざしは、同時に、社会からの排除を包摂する貯金箱のように積み重ねられていったように思える。

最近でも、西成差別という事象の報道があった。西成のイメージは、釜ヶ崎を中心とした地域のイメージでとらえられているのだろうか？　たしかに、結核罹患率やさまざまな健康指標においても、異常だと思える。いっぽうで、この地域

では個として生きざるを得なかった人々に、真冬の焚き火のように火を燃やし続ける人々の存在もある。

この間、本誌でこの地域の変化を伝えてきた。日本経済の転機は、この地域にパイロットケースのように現れる。華僑資本問題、民泊問題、教育の問題もある。さまざまな問題を抱えつつも、地道にその課題や問題に、地域住民の当事者観を軸に、参加と共同を積み上げている人々や団体がある。

今回は、月刊誌「福祉のひろば」刊行四〇年という節目に、この釜ヶ崎でのさまざまな取り組みのなかで、釜ヶ崎のまち再生フォーラム（ありむら潜事務局長）と総合社会福祉研究所での共催、福祉のひろば後援で開催できたシンポジウムを軸に、特集をおこなうことにした。それぞれの活動とつなぎ合わせる機能、その機能の維持発展に向き合う人々がいる。今なら笑える人々がいる。「いまならでは」である。

四月号のグラビアで、沖縄県八重山郡竹富町西表船浮集落を紹介した。社会の構造や環境は釜ヶ崎とは比較できない。しかし、人が生き、人として生き、個と社会がある。違いを見つけるのではなく、何が、今の日本社会に問われているのかをさまざまな地域の状況から、そして、社会福祉の側面から考えたい。

（編集主幹）